

(1) 青年海外協力隊活動現場視察

※写真の説明はすべて参加教員のコメントで構成されています。

《JICA ボランティア事業とは》

発展途上国からの要請(ニーズ)に基づき、それに見合った技術・知識・経験を持ち、「発展途上国の人々のために生かしたい」と望む方を募集し、選考、訓練を経て派遣する事業です。その主な目的は、(1)発展途上国の経済・社会の発展、復興への寄与、(2)友好親善・相互理解の深化、(3)国際的視野の涵養とボランティア経験の社会還元です。

なかでも、2015年に派遣50周年を迎える、青年海外協力隊(20～39歳)は、これまでにのべ3万9000人を超える方々が参加しています。

7月29日:カブウラ中高等学校(理数科教師)



生徒に実験を指導する来島隊員(カブウラ中等学校)

「生徒の一所懸命で、来島隊員を食い入るような目で見ると印象的であった。生徒の生き生きとした表情で実験に取り組む姿が忘れられない。」

「日本の学習環境がとても素晴らしいことが認識できたと同時に、マラウイの生徒の勉強に対する直向きさは日本の生徒と対照的に映った。日本の生徒にもこれらを紹介し、なぜ勉強をするのか、学び原点を考えさせる良い機会になるようにしたい。」

《来島孝太郎さん・理数科教師》

理科教育の向上を目指し、中高等学校での理科教師としての活動に加え、地域内の学校を巡回し、現地教師の理科実験のサポートやアドバイスをを行っている。

7月29日:カムズ中央病院(理学療法士・看護師)

「入院患者が多すぎて、病院のベッド数が間に合っていない。ベッドに寝ることができない入院患者は、通路にマットや段ボールを敷き、そこで寝ている。ベッド不足の深刻さを感じた。」

「印象に残っていることは次の3つ。『医療費がかからないこと』、『日本と比べられない数の患者が、処置の遅れや医療ミスなどで日々亡くなっていくこと』、『遺族からの苦情は一切なく、その死を受け入れ、感謝して帰って行くこと』



病院の調理場(カムズ中央病院)



病院で活動中の上野隊員(右)と奥村隊員(左)

《上野 友也さん・理学療法士》

国内4か所の国立中央病院のうち首都にある配属先病院の理学療法科にて、外来・入院患者双方のリハビリ治療を行っているほか、実習生の指導にもあたっている。

《奥村 和美さん・看護師》

「病院運営改善に向けた5S-KAIZEN-TQM普及」プロジェクトと連携し、院内での5S-KAIZENの普及を通じた職場環境の改善、医療品質の向上を目指している。

(2) 無償資金協力プロジェクト

《無償資金協力とは》

被援助国(開発途上国)等に対し返済の義務を課さない資金協力であり、開発途上国の経済社会開発に資する計画に必要な資機材、設備および役務(技術および輸送等)を調達する資金を供与(贈与)するものです。病院、学校、道路等の建設を行う「施設の建設」や、医療機材や教育訓練機材等の調達を行う「資機材の調達」など、主にハード面での協力を行うのが無償資金協力です。

8月1日：マンゴチ橋

「日本が建てた橋やダムの所で、洗濯したり水浴びをしたりする人達がいる、日本国民の税金が役立っていて良かったと思った。」

「とっても立派なマンゴチ橋。物資輸送などでマラウイが繁栄するために協力できたことを誇りに思う。」

「この橋の完成により、橋自体の耐荷力が上がって、貨物輸送量が増大しても大型車の通行が可能になった。物流能力を高め、マラウイの経済活動の活性化に貢献していた。」



マンゴチ橋

(3) 草の根技術協力事業

《草の根技術協力事業とは》

日本の NGO、大学、地方自治体及び公益法人の団体による、開発途上国の地域住民を対象とした協力活動を JICA が政府開発援助(ODA)の一環として、促進し助長することを目的に実施する事業です。

7月31日：ブワンジェバレー灌漑スキーム

「震災で大変だった宮城県からの派遣で、技術指導によりコメの収穫が2.5倍になり、素晴らしいことだと思った。」

「灌漑を作った後の維持・管理がこんなに大変だと思わなかった。また、それを研修生に身に付けてもらおう試みがいいなと思った。」



灌漑施設でお洗濯



灌漑施設を見学

《梶田 英貴さん・農業土木》

農業灌漑の技術支援を目的に宮城県と連携し、同県の農業土木技術職員をボランティアとして派遣する「みやぎ国際協力隊プロジェクト」(2010～2015年度)の一環。2代目となる彼は、前任者の活動を引き継ぐとともに、新たな支援対象地域を選定し、灌漑施設の復旧・改良を実施中。

（４）技術協力プロジェクト

《技術協力プロジェクトとは》

JICA が海外で実施する中心的な事業のひとつで、日本と途上国の知識・経験・技術を活かして、一定の期間内で共に問題を解決していく取り組みです。事業実施にあたっては、日本から専門家を派遣し技術面でのサポートを行ったり、途上国から人材を受け入れて日本で研修を行ったり、必要な機材を供与するなど、目標達成をめざし成果を重視した協力を行っています。現場の状況に応じたオーダーメイドの協力計画をつくりあげ、実施していくことによって広範な途上国のニーズに効果的・効率的に応えています。

7 月 30 日：地方給水運営維持管理プロジェクト（ムチンジ）



井戸はみんなの共有財産

「マラウイ人は数学に弱いため、会計簿のつけ方を村の代表者ら皆で勉強していた。井戸管理委員会の調印式の最中、参加者達がずっと歌い踊っていたのが印象的であった。」

「村長さんや給水運営維持管理委員会の人々に女性が多いことに驚いた」

「識字率が低い給水施設受益者に対してもメッセージが伝えられる、『歌』を促進ツールとして意識づけを行っていた。また、給水運営が持続可能な取り組みとなるよう、様々な工夫がされていた。」

8 月 2 日：シレ川中流域における流域保全活動推進プロジェクト

「師匠である普及員が、弟子であるリードファーマーに技術を伝え、孫弟子である一般農民まで伝承させるという、日本の職人の世界にも通ずるようなシステムは、とても親近感がわいた。」

「良い政策は色々あるのだけれども、それが実行に移せないジレンマ。・たまたま立ち寄った村の人から支援を頼まれ、そこからも支援が発展する幅の広さに驚いた。」



マラウイの農村地帯



香島隊員と村長さんから話を伺う

《橋本 裕保さん、香島 絵里奈さん・コミュニティ開発》

2007 年から 2012 年にわたり実施された技術協力プロジェクト (COVAMS) の事後モニタリングを実施しつつ、これまでの成果が確実に定着するよう指導を行っている。また、アグリビジネスをはじめ農業開発事務所が担当する普及員から農民への効率的な情報伝達や技術普及の促進を支援している。

7月30日：ホームオブホープ孤児院

「『孤児院』という言葉のイメージから、または日本的な感覚から、勝手にネガティブなイメージを抱いていたが、そこはまさに『Home of Hope』であった。」

「500人もの孤児がいることに驚いた。また、孤児院の理事長が盛んに寄付を求め、各施設を誰が寄付してくれたかを説明していたので、寄付を頼りに生きている発展途上国の現状を感じた。」



職業訓練を受ける生徒（ホームオブホープ）

7月31日：国連世界食糧計画（プログラムオフィサー）



今年も田中隊員の活動先を訪問しました

《田中晴子さん・プログラムオフィサー》

茨城県阿見町出身。学校給食配給、病院・保健センターを通じた栄養失調児への食糧支援活動。難民キャンプでの食糧配給等プロジェクトにおいて、現場モニタリング担当者としてロングウェ本部のプログラムユニットの調整業務を行っている。

「田中隊員は、『管理する大切さ』を伝え、どうすればいいかを丁寧に教え、内に秘めた情熱で、実直に、地道にこつこつと難しい要請内容をこなしているようにみえた。日本人らしさを感じる隊員だった」

「子どもたちの症状を見極める看護師も正しく表を読み取ることができず、重症な飢餓であるにもかかわらず見逃されてしまうこともあるそうだ。ここでも算数教育の影響を感じた。」

「同じ茨城出身の田中隊員に案内、説明をもらった。小柄な女性だが、アフリカの飢餓の問題に立ち向かい、淡々と現地の人と関わっている姿は日本人として頼もしかった。」



栄養食を作るお母さん

8月2日：ソチェ技術訓練校（IT教育）



竹野隊員（右端）と生徒たちと一緒に

「熱心にIT学習に取り組む大学生達に、もっとコンピュータがあったらいいとつぶやいた先生の言葉が心に残った。また、一緒に折り紙の手裏剣作りに取り組んだ学生と心が通い合い嬉しかった。」

「折角高等教育を受けたのに、職がないというジレンマ。生徒たちは、手裏剣のおり方をすぐに覚えて、理系の実力を見せつけられた。」

《竹野 徹さん・コンピュータ技術》

IT技術者の育成を目指し、配属先の専科でプログラミングやウェブデザインの講義のほか、他の学科の生徒に対してもマイクロソフトオフィスの利用スキルの講義を行っている。また、キャリアセミナーの開催を通じて生徒の就業機会向上を図っている。

(5) 交流授業

～茨城県・栃木県の先生たちが、マラウイの子どもたちに授業を行いました～

8月1日：モンキーベイ中等学校



大きな紙を使って紙飛行機の作り方を紹介



ペンケース作りに真剣に取り組むマラウイの生徒たち

「生徒の真剣でひたむきな態度に、授業者である我々も充実した時間を過ごし、得るものも多かった。」

「表現しようのない混沌としたエネルギーな状況の中、現地の子供たちと一緒に踊ったヨサコイは一生忘れられない良い思い出となった。」

「たくさんの子供達が歓迎してくれ、授業も意欲的に取り組み、別れ際には皆ハグしてきた。マラウイの子供達の純粋さ、人懐こさ、あたたかい心が伝わってきた。」

「いよいよソーラン節初披露！青空の下、気合いの入ったかけ声と踊り。そこにいたみんなが一つになった。「すごい！」の一言につける。感動した！これで掴みはOK!!!その後の交流授業。エネルギーな子どもたちに負けないように、英語は苦手だけれども、伝えたいことを身振り・手振り・単語で精一杯伝えた。積極的に声をかけた。言葉は通じないけど、子どもたちと想いは通じ合えたような気がする。そして、何よりも授業をやっている自分自身が楽しかったし、みんなで達成感を味わうことができた。」



上手に折れた紙飛行機に思わず笑顔



ヨサコイソーラン初披露！



ペンケースを持って野村隊員(左端)と一緒に

《野村 理恵さん・理科教育》

理科教育の向上を目指し、中高等学校での理科教師としての活動(生物・数学を指導)に加え、地域内の学校を巡回し、現地教師の理科実験のサポートやアドバイスをを行っている。

8月4日：マタピラ教師研修センター



はじめての四人五脚！



はじめてのじゃんけん！

「『身体能力は高いが連帯感や協調性に欠けるアフリカ人は、4人5脚では速く走れないのではないか』という予想を見事に裏切る快走で、周囲を驚かせた。何より、児童たちが心底楽しそうに取り組んでおり、それにつられて授業者や、周りにいる者みんなが良い表情になってしまう。純粋に生きるマラウイの子どもたちに教育の原点だけでなく、『生きる』ことの原点を教えられた気がした。」

「交流授業では、どの授業にも生徒が熱心に参加してくれて、現地の先生からも楽しかったと言われてうれしかった。特に、4人5脚については、初めての経験にも関わらずその飲み込みの早さ身体能力に驚いた。」

「英語がわからない生徒も多かったが、言葉が通じなくてもコミュニケーションは十分に取れることがわかった。」

「交流授業がうまくいき、国が違っても生徒達と心が通い合い嬉しかった。また、日本の生徒達が作った折り紙も喜んでくれた。」



日本の生徒に向けてのメッセージ



マラウイから歌のプレゼント



坂田隊員(右端)

《坂田 真吾さん・青少年活動》

配属先である教師研修センター管轄地区の小学校を巡回し、表現芸術科目(情操教育総合科目)の向上に向けて支援している。現地教員とのチームティーチングや、図工・音楽・体育分野でのアイデア共有を行っている。



日本からお返しのヨサコイソーラン

(6) 表敬訪問

7月28日: 在マラウイ日本国大使館

「西岡大使にマラウイの現状と課題について詳しく説明していただいた。」「(マラウイは)世界で3番目に貧しい国。JICAは早くから援助。国の偉い方々もかつて日本人に教わったことがある達が多く、今でも感謝している」

《在マラウイ日本国大使館》

マラウイが 1964 年独立以来、日本とマラウイ国は良好な関係を維持。1989 年からは在ザンビア日本国大使館がマラウイを兼轄、2008 年 1 月に在マラウイ日本国大使館が開館した。



在マラウイ日本国大使館表敬

(7) 研修員受入事業

《研修員受入事業とは》

国造りの担い手となる開発途上国の人材を「研修員」として受け入れ、技術や知識の習得、制度構築等をバックアップする事業です。現在、世界の開発途上国から JICA 全体で年間約 11,500 名、JICA 筑波で約 800 名の人材を受け入れています。

「家族や親戚であたかくもてなしてくれ、Warm heart of Africaを感じた。JICA 筑波で学んだことをマラウイで生かしていて、嬉しく思った。」「シマをはじめ、料理はどれもが本当においしかった。1週間前に生まれた赤ちゃんが部屋にいて驚いたが、その母親が 10 数人分の料理をつくってもてなしてくれたのにも驚いた。母強し。」

《ナマオナ・ウィリーさん》

2011 年 2 月から半年間、JICA 筑波で「かんがい排水による流域水管理コース」の研修を受講。帰国後はマラウイ大学ブンダ校農業工学科で教壇に立ち、日本で学んだ知識を学生に伝え、マラウイの農業や農村開発を担う人材育成に尽力している。



ウィリーさん(前列右から3番目)のお宅訪問

(8) 日本の NPO 活動現場

8月4日: 日本のNPO 「日本国際民間協力会(NICCO)」活動視察



NICCOの支援による井戸

「井戸の説明のときは井戸の歌、トイレの説明のときはトイレの歌を歌ってくれ、アフリカの人にとって、歌と踊りは生活と切り離せないものだと思った。とにかく、子どもと女性がとても元気で明るく、大きなエネルギーを感じた。」

「村の代表者の話を聞き、村の生活に事業がしっかりと根付き、大きな信頼関係で結ばれていることがわかって感動した。ここまでの関係を築くまでの苦労は計り知れないと思う。」

《公益財団法人 日本国際民間協力会(NICCO)》

詳しい活動内容につきましてはホームページをご覧ください。

<http://www.kyoto-nicco.org/index.html>